

## 画像における情動表出の多様性

村山 正碩（社会学研究科院生）

絵画や写真といった画像は、リンゴや富士山といった目に見える事物を描写するだけでなく、目には見えない情動を表出することもできる。たとえば、レンブラントの自画像は自尊心を、ムンクの『叫び』は実存的不安を表出している。画像に関する哲学的研究において、描写は一大トピックであり、非常に盛んに議論されている。一方、画像の表出作用は十分に議論されているとはいえず、その特徴はあまり明らかにされていない。本発表はドミニク・ロペス、ミッチェル・グリーンらの研究に基づき、画像における情動表出の多様性を体系的な仕方で明らかにしたい。

多様性を体系的に探求するには、共通点が良い出発点となる。しかし、画像表出は一見したところ、雑多な現象の寄せ集めである。日常生活に見られる情動表出と比較しよう。われわれは表情や身振り、発話を用いて情動を表出する。したがって、画像は何らかの表情や身振りをしている人物を描くことで情動を表出できる。一方、画像は情動を表出する光景を描くこともある。これは日常生活では見かけないものだ。たとえば、『叫び』に描かれたうねるような空は（描かれた人物とともに）不安感を表出している。また、ロマン主義者が発明した「表出としての芸術」という考え方によれば、画像的芸術は作者の情動の表出である。ゴッホの『カラスのいる麦畑』はゴッホ自身を描いていないにもかかわらず、ゴッホの情動を表出しているといわれる。これらの現象を統括する画像表出なるものをどう理解すればよいのか。ロペスは画像表出とは何かという問いを、画像表出のメカニズムとは何かという問いから切り離し、前者だけを説明しようとする。その結果、ロペスの理論は説明力が弱いという欠点をもつが、画像表出の多様性の探求の出発点としては利用可能である。

画像表出のメカニズムはなおも謎に包まれているが、グリーンは問題解決の糸口を示唆している。グリーンによれば、画像表出には根本的に異なる二種類の情動の示し方がある。すなわち、情動がどう見えるかを示すケースと、情動がどう感じられるかを示すケースとに分けられる。したがって、画像表出のメカニズムはそれぞれの情動の示し方に応じた理論を要する。グリーンが実際に提出している説明には問題点が指摘されており、改善を要するが、本発表は画像表出のメカニズムを直接問題にするわけではない。むしろ注目すべきは、画像表出が二種類の情動の示し方をもつということだ。

私はロペスやグリーン議論を検討し、そこから画像表出の多様性を明らかにするうえで重要な洞察を引き出す。そして、画像表出がいくつかのパラメータをもつことを指摘する。それらのパラメータに注目することで、画像表出と見なされる雑多な現象が一つの体系へと位置づけられ、いくつかの見落とされやすい変種も明らかになることだろう。